みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

北東インドの歴史：イギリスのインド支配

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗田, 靖之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003707

イギリスのインド支配

かつてはアッサムと呼ばれ，現在は北東インドと呼ばれている地域におけるイギリスの支配確立を見る前に，インドにおけるイギリスの勢力確立の過程を概観したい。

1600年，イギリスの東インド会社が設立された。1702年には以後200年以上にわたってインド経営の中心地としての機能を果たす，カルカッタ (Calcutta) のウィリアム・フォート (William Fort) が完成した。またフランスとイギリスの抗争は，1757年のプラッシーの戦いにおいてイギリスの勝利となったことにより，インドでのイギリスの優位が決定的となったのである。

18世紀になると，インド国内のシク教徒やラージプト族，マラータ族の反乱によって，もはやムガール (Mughal) 帝国は名目上の存在となった。1765年，東インド会社はムガール皇帝に年金を支払い，ベンガル (Bengal)，ビハール (Bihar)，オリッサ (Orissa) の徴税権を獲得した。これによってムガール皇帝は実質上の支配権を消失したのである。1773年，東インド会社は本国政府の監督下におかれ，ベンガル知事はベンガル総督となり，カルカッタに首都が置かれた。そして19世紀中頃には大部分の土候国を服属させた。1857年，反イギリス闘争としてのセポイの反乱がおこったがこれも鎮圧されて，1858年ムガール帝国は消滅した。イギリスは東インド会社を解散し，1877年ヴィクトリア女王はインド皇帝となり，インド帝国が成立した。

アッサム地方のインド帝国への併合

ガウハティ (Gauhati) の王ハラダッタ・ブザルカルア (Haradatta Buzarkarua) は，アホム (Ahom) の家臣としては無能であると辱めを受けて追放された。

ハラダッタは，ダラン (Darrang) の二人の王，ハンサナラヤン1世 (Hansanarayan I) と2世にアホムへの反乱をそそのかした。ハンサナラヤン2世はハラダッタの申し出を受けたが，1790年アホムとの戦いで敗れ，アホム王ガウリナータ・シン (Gaurinath Singh) の命令で，残酷な方法で死刑に処された。ハンサナラヤン2世の息子のクリシュナ・ナラヤンは，17歳であったが，王位継承権も奪われた。ハラダッタは，クリシュナ・ナラヤンにアホムに対して憎しみを抱くダラン (Darrang) やカムルップ (Kamrup) の指導者たちと反乱を起こすように勧めた。これらの反乱者は，ゴアルパラ (Goalpara) の元関税取り立て請負人 (salt-revenue) でヨーロッパ人商人のダニエ

ル・ラウシュ (Daniel Raush) に助けを求めた。ラウシュは，アッサム商人に70,000ルピーの借りがあったので，この借りをこの機会に帳消しにしようとして，前もってアホムの王ガウリナータ・シンに700人のバルカンダズ (Barkandaze) と呼ばれる武装した家来を貸し与えた。しかし，王の警護をしていたこの連中は，モアマリア派のヒンドゥー教徒との戦いで大半が戦死した。つぎにラウシュは，クリシュナ・ナラヤンに接近した。ラウシュは，クリシュナ・ナラヤンにダランとカムルップを領有させることを約束して，1791年の初めにアッサムを訪れた。

1791年，クリシュナ・ナラヤンは，東インド会社に軍事援助を依頼し，その費用を負担する旨，申し出た。東インド会社は，アッサム土侯らの内政問題に巻き込まれたくないという態度をとった。そこでクリシュナ・ナラヤンは3,000人のシク教徒やインド各地からの兵隊を雇った。これらのバルカンダズと呼ばれる連中は，ベンガルからの流れ者で，乞食をしたり，盗みを働いたりする連中であった。アッサムにおいても，これらのバルカンダズは略奪を働いたのである。

1791年12月，クリシュナ・ナラヤンはハラダッタとともに，ブータンとビジニ (Bijni) からアッサムに入り，ダランの王と名乗って，ガウハティに向けて進軍した。やがてクリシュナ・ナラヤンは，ガウハティの北方にいたり，アホム王ガウリナータ・シンの軍隊を破って，1792年2月には，ブラマプトラ川の北岸に達した。しかし，彼の軍隊の主力をなすバルカンダズは略奪の限りを尽くしたのである。

バルカンダズを自らの力で追い払えないことを知ったアホム王のガウリナータ・シンは東インド会社に援助を求めた。東インド会社は，クリシュナ・ナラヤンが，東インド会社の領地において徴兵行為を行なったこともあり，そのような略奪行為に対して，東インド会社の名前を使ってはならないという警告を発した。それに対してクリシュナ・ナラヤンは，バルカンダズの一行は賃金に見合った行為をしているだけで，東インド会社には関係ない旨回答をよせてきた。

一方ガウリナータ・シンは，ラウシュを招き，アホム王国の荒廃を東インド会社に報告してもらおうと考えた。ラウシュは，膨大な借金を帳消しにするためにも，何艘かのボートに塩，宝石，サンゴ，ガラス，絹を積んで1792年4月ガウハティにおもむいた。彼は北ガウハティのクリシュナ・ナラヤンに会い，アッサムの王との仲介役を買って出た。クリシュナ・ナラヤンとの交渉中の1792年6月，新たな600人のバルカンダズがアッサムの地にやってきた。6月30日バルカンダズはラウシュのボートを襲い，ラウシュとアッサムの役人は辛うじて逃れることができただけであった [Baruah 1985: 326–330]。

ウェルシュ大尉のアッサム遠征

自らの手で，この事態を扱えなくなったアホム王ガウリナータ・シンは，東インド会社に軍費を負担するので援軍を求める手紙を送った。総督のコーンウォーリス(Cornwallis)卿は，自衛のための戦争以外を禁じた法律があるにもかかわらず(Pitt's India Act 1784)，アッサムの民情を知り，通商を行なう最大のチャンスと考え，1792年9月，ウェルシュ (Welsh) 大尉以下360人のセポイ (Sepoyインド人傭兵) をアッサムに送った。ウェルシュは，1792年11月16日にはガウハティに到り，ナガル・ベラ・ヒル (Nagar Bera hill) で，アホムの王ガウリナータ・シンを救出した。ウェルシュは，11月25日，奇襲を行ない，ガウハティを奪回した。11月27日，ウェルシュ大尉は，バルカンダズの首領に手紙を送り，10日以内にガウハティに来るように手紙を送った。しかし，バルカンダズは命令に従わなかったので，12月6日，ウィリアム (William) 少尉の率いる部隊が，1,500人にもおよぶバルカンダズを追い払い，アッサムに平和をもたらした。クリシュナ・ナラヤンは，ハラダッタとともにブータンに逃れた。

ウェルシュ大尉は，バルカンダズを駆逐するという役目を果たし，アホム王ガウリナータ・シンの地位を回復することに努力したが，このガウリナータ・シンは阿片中毒でいかにも無能であった。ウェルシュ大尉はこのガウリナータ・シンを見限り，クリシュナ・ナラヤンとハラダッタにイギリスに楯突くことの無駄を説き，ガウハティに来ることを勧めた。彼らは400人のバルカンダズとともに、1793年5月20日ガウハティに到着した。そして彼は，ダランのラジャ (Raja) に復帰した。

1793年2月28日，ガウリナータ・シンとウェルシュ大尉は，アッサムの通商条約に調印した。その後，ウェルシュ大尉はアッサムの内紛にかかわりつつ駐留を続けた。しかし，ウェルシュの分遣隊の駐留費の負担をめぐって，アホム王国との間に問題が生じ，4月21日には，ウェルシュ大尉は7月1日までに東インド会社の領土内に引き上げるように命令を受けた。そして，ウェルシュ大尉は非常な失望のうちに，7月1日にガウハティを出発した [Baruah 1985: 326–346]。

ウェルシュ大尉は，その時まで閉ざされたアホム王国に，東インド会社の肩書で，入国した最初の人物ということになる。このウェルシュ大尉の遠征以降イギリスとアッサムの間で，通商関係が開かれることとなったのである。

一方東に目を転じると，ビルマ最期の王朝であるアヴァ王朝は，18世紀から19世紀はじめにかけてアッサムへ進出した。アッサムにおけるイギリスの弱体に乗じて，ビルマの王は，1818年には，かつてアラカンに朝貢したベンガル諸地域の割愛を要求する書簡をベンガル総督に送りつけ，1819年には，アッサムを占領した。そうして1823

年末，カルカッタ占領をめざすビルマ軍が東部ベンガルに進撃し，1824年イギリスはこれに宣戦し，全面戦争に入ることとなった。これが第一次ビルマ戦争である。

1824年1月，ブラマプトラ川のビルマ総督がカチャール (Cachar) に侵入する意図があることを知ったイギリスは，600名からなる部隊を派遣しこれを撤退させた。つづいて，5月には3,000名の兵と若干の砲，一砲艦をともなったイギリス軍が，ガウハティに集結した。ビルマ軍は住民を虐殺しながら上部アッサムのマラ・ムーク (Mara Mukh) へ撤退した。しかし季節は雨季となり，イギリス軍はガウハティに滞在を余儀なくされた。その隙に乗じふたたびビルマ軍はコリアバール (Koliabar)，ラハ (Raha)，ノウゴン (Nowgong) まで侵攻した。雨季が明けた10月，イギリス軍は行動を開始しビルマ軍を敗走させ，ビルマ軍はジョルハット (Jorhat) に退却した。1825年1月27日，イギリス軍のシブサガル (Sibsagar) に近いランプール (Rangpur) のビルマ軍要塞を攻撃し，ビルマ軍の敗戦は決定的となった。

一方この地における約7,500人と推定されるビルマ系のシンポー（カチン）族の横暴は，目にあまるものがあった。ビルマ軍の占領中，シンポー族はアッサム人をたえず攻撃し，数千人の奴隷をアッサムから連れ出していた。1825年，ふたたびビルマ人がパトカイ (Patkai) 山脈を越えて現われたが，シンポー族はこれらビルマ人と呼応して行動を起した。イギリス軍はヌーフヴィル (Neufville) 大尉を送って，ノア・デヒン (Noa Dihing) 川を遡行し，ビサ (Bisa) 付近のシンポー族の部落から彼らを駆逐した。これ以降ビルマ人のアッサムへの侵略はとだえたのである。

一方マニプール (Manipur) をビルマ人から開放する試みは，ガンビール・シン (Gambhir Singh) が組織したマニプール人とカチャリ人との混成部隊によっておこなわれた。この部隊の指揮はイギリス軍ペンバートン (Pemberton) 中尉によって指揮されたのである。

イギリスはビルマの首都アヴァ (Ava) 近辺まで迫ったためビルマ王バージドーは降伏し，1826年2月24日ヤンダボ (Yandabo) 条約によって，ビルマはアッサム，マニプールを放棄し，アラカン・セリムを割愛した。また，ガンビール・シンをマニプールの王と認めることを約束させられたのである。ここにいたって，イギリスのアッサム支配は確立したと言える。

しかしビルマ人によるブラマプトラ川流域の支配の結果，この地の情況は悲惨を極めた。約30,000人の住民が奴隷として連れさられ，人口が激減したのである。しかしこの地方の秩序もやがて回復された。

マニプールはガムビール・シンの手にもどった。ジャンティア王ラーム・シンには，

山地とスルマ (Surma) 川北岸の所有が確認された。ゴービンド・チャンドラは，カチャールの王に復帰した。しかし1824年5月6日に締結された条約により，ゴービンド・チャンドラ王は東インド会社に隷属することとなった。

ブラマプトラ川流域は，荒廃がはなはだしかった。アッサム地方はイギリスにより永久に支配されるべきであるか，または土着の王にその支配権をまかせるべきであるかは，たびたび議論されたが，結局1833年にいたって，上部アッサムのサディヤ (Sadiya)，マタック (Matak) を除いて，アホムのプランダール・シン (Purandar Singh) を王として彼の手にゆだねられるべきであるとされた。しかしその3年後にはプランダール・シンはイギリスと約束した貢税の支払を滞らせたために，1838年10月，この地はイギリス領に併合されることとなった。そして1823年11月，南はカチャールから北はシッキムにいたる東部国境に対する総督理事官にデヴィッド・スコット (David Scott) が任命された。ここにアホム王国は名実ともに滅亡したのである。サディヤ，マタックも1842年にはイギリスに併合された。

ガロ (Garo) 山地を含むが，東デュアール (Duar) を除くゴアルパラは，ムガール皇帝により1765年8月12日から東インド会社に譲渡され，ベンガル州の一部となっていた。

1829年デヴィッド・スコットの提案によりブラマプトラ川とスルマ川との間を連絡すべくラニ (Rani) からヌンクロー (Nungklow) を経てスルマ河谷にいたる道路の建設が開始されていた。この道路が完成するとイギリス人が警官を送り込みカーシ (Khasi) 族の自治を犯すという噂がその建設現場で流れ，暴動が発生し，カーシ族がイギリス部隊に攻撃をかけてきた。山地民は執拗に抵抗したが，1833年1月9日この反乱も平定され，カーシ族もイギリスの支配下に入った。

カチャール王国は，ゴービンド・チャンドラの死後，その後継者がなく，インド帝国の直轄地に併合されたのである。

ジャインティア山地はジャインティア王によって統治されていたが，1832年イギリス人4名の殺害事件が発生し，1835年5月15日イギリスは軍隊を派遣してジャインティア地区をインド帝国領に併合した。

ブータンに隣接するデュアール地方はアホムとブータンによって保有されていたが，1841年この地方一帯をインド帝国領とし，ブータンには年10,000ルピーを支払うことが約束された。

第二次ビルマ戦争は総督ダルハウがビルマを挑発して口実をつくり，最後通牒を突きつけて開戦した。ダルハウは，大軍で下ビルマを占領し，下ビルマの併合を要求し

た。ビルマ側これに応じなかったが，イギリスは一方的に併合を宣言し，1853年アヴァ王朝を内陸に閉じこめ，ここに第2次ビルマ戦争が終結した [山本 1960: 183–184]。

アッサム東部の山地に住むナガ (Naga) 族はアホム王国によっても征服されたことがなかったし，イギリスもまたナガ族を吸収する意図はなかった。しかし1866年，アンガミ (Angami) 地方を併合し，その住民の野蛮性を矯正することとなった。その結果1889年にはロタ・ナガ (Lhota Naga) 族の地方が併合され，1889年にはアオ・ナガ (Ao Naga) 族の地方も併合された。これによってインド帝国の統治地域はビルマ，マニプール王国の北辺と境を接することとなったのである。

1877年アンガミ族が，カチャ・ナガ (Kacha Naga) 族を襲撃した。アンガミ族はコヒマ (Kohima) にむかって進撃し，そこを11日間にわたって包囲したが，やがてイギリス軍によって撃退された。

ガロ山地の住民は首狩りを行なうことが知られていた。この野蛮の行為を改めさせるために，その全域を一つの行政単位のもとに置くことが検討された。そして1869年ひとつの県としてその県庁をテュラ (Tura) に置くこととなった。1872年とその翌年パトロール隊がこの地におくられ，この県のインド帝国への併合が完成した。

ルシャイ (Lushai) 山地には，1849年ルシャイ族が侵入してきたが，懲罰の軍隊が派遣され鎮圧された。1868年ふたたび侵略がおこったが，1871年には懲罰の軍事行動が効を奏した。1889年にはチッタゴン (Chittagong) 境に反乱がおこった。しかし1898年4月1日にはこの地方もインド帝国領に併合されたのである。

このようにアッサムがイギリス領となり，イギリス国民と地方の部族民の接触が増えるにしたがい，いろいろなトラブルが生じてきた。また僻地に茶園が開かれ，山地民にかかわる事件が発生したため，1873年「内郭線条例」によって，内郭線 (Inner-line) が制定され，イギリス国民であっても，特別の許可のないものは，この線を越えることは禁止されたのである。またこの内郭線以遠の地には，税金を課さなかったのである。また内郭線の外側に，仮の国境としての外郭線も設定した。

1800年の中頃，ブータンの東のタワン (Tawang) 地方は60マイルにわたって真っすぐにアッサム平原につき出しており，この地はチベット領と認識されていた。1872年から73年にブータンとの国境が確定されたときにも，タワンがチベット領であることはなんら問題とはならなかったのである。

1905年，アッサムは「東ベンガルおよびアッサム (Eastern Bengal and Assam)」とよばれる州で形成されていたが，これは比較的短い期間で，1912年からはアッサムは行政長官の支配する独立した州となった。1921年にはアッサムは州知事の支配する

州となったのである。このような目まぐるしい変化には，つぎのような政治的な事情があったからである。

1905年7月総督カーゾンは，これまで単一の州として一人の準州知事の下におかれていたベンガル，ビハール，オリッサを二つの州に分割することを発表した。理由は，面積，人口ともに過大で，能率的な行政が困難であるということがその理由であった。この分割は人為的なもので，大きな反対運動が繰り広げられた。しかし1905年10月分割は強行された。この分割の日，ベンガル一帯は大変な反対運動が行なわれた。結局ベンガルの分割は，インドの民族運動を大きく進める結果となったのである。

1911年，イギリスの国王ジョージ5世は，初めてインドを訪れたが，その折りにこの評判の悪いベンガルの分割を取り消し，西からビハール，オリッサ，ベンガル，アッサムの州が置かれることとなった。これによって危険な民族運動の禍根を除くことが，その大きな目的であった。また同時に，民族運動の大きな拠点となりつつあったカルカッタから首都をデリーへと移した [山本　1960: 312]。

同じ1911年，イギリスの一士官が仮の国境である外郭線を越えた北側で殺害されるという事件が勃発した。ロンドンでは，討伐隊を派遣すべきであるという決定がなされた。このことにより，イギリス政府は外郭線を越えて前進策を取る方向に政策変更がなされたのである。これがミリ討伐隊と呼ばれるものである。ミリ族とはアボール族のことである。

1907年，インドとロシアの間に協定が結ばれた。これはチベットを，インドとロシアの緩衝地帯としようとするものであった。1911年から12年には清亥革命がおこり，チベットにおける中国の権力が崩壊した。このような情勢を受けて，1913年10月，イギリスはシムラ (Simla) において会議を招集した。この会議への出席国は中国，チベットそれにイギリスであった。1907年のイギリスとロシアとの協定により，中国を介さないでチベットと交渉することは禁じられていたのである。そのためシムラ会議はチベットと中国との関係をとりつくろうためという口実のもとに開かれた。この会議のイギリス側代表団の主席はヘンリー・マクマホン (Sir Henry McMahon) であった。会議の表むきの目的はチベットを外蔵と内蔵とに分割して，外蔵においては中国の行政権が行使されないようにすること，すなわちインドとの国境地帯から中国の影響力を排除することであった。1914年4月，中国代表は，外蔵と内蔵の境界線に関する協定にイニシャルの署名をさせられたのである。しかし，これは正式な交渉成果とみなされず，シムラ会議は三国を交えたいかなる協定をも生みださなかったのである。

しかし実際には，シムラ会議には秘密の副産物があった。シムラ会議に先立って，1914年2月から4月にかけて，イギリスとチベットの代表はデリーにおいて会談をし，チベットとアッサムの境界線に関する合意が成立していた。これがマクマホン・ラインである。この協定においては，国境線はタワンの北方12マイルのところを通っており，アッサム平原に張り出したチベットのくさびはインド領に取りこまれることになったのである。しかしこの会議には中国は出席を要請されなかったし，協定の内容は中国には一切知らされなかった。1914年3月24日イギリスとチベットとの間でこの協定に調印が行なわれた。マクマホン・ラインはほぼヒマラヤの主脈に設定されたのである [マックスウエル　1972: 48–52]。

第二次世界大戦中，イギリスに協力しインドの独立を果たそうと運動を進めていたマハトマ・ガンジーに対して，チャンドラ・ボース (Netaji Subhas Chandra Bose) は，インドの独立は戦いとるべきであると主張した。1943年8月1日日本軍の手によって，イギリスの植民地であったビルマが独立した。ボースは，1943年11月にシンガポールに自由インド臨時政府を樹立した。そして，日本軍とチャンドラ・ボースの率いる自由インド軍 (INA) は，1943年9月からビルマからアッサムに入り軍事行動を開始した。この作戦の目的は，重慶にあった蔣介石政府への支援ルートの遮断と，インドの武力解放であった。1944年4月12日には，モイラン (Moirang) において，自由インドの独立を宣言した。そしてインパール，コヒマをめぐって，死闘が繰り返されたが，1944年7月3日大本営からインパール作戦の中止命令が出され，日本軍の敗走がはじまった。その結果，このインパール作戦において，日本側は40,000人の死傷者を数えたのである。

1947年8月14日インドは独立をはたした。1949年インドはブータンと条約を結び，かってイギリスがはたしていた役割を今後はインドがはたすこととなった。1959年にいたると，時の首相ネールはインド国会において，チベットとの国境線はマクマホン・ラインを採用することを言明した。1950年の憲法でこの地域は「北東辺境地方 (North-East Frontier Agency, N.E.F.A.)」と命名され，インド辺境庁の管理下におかれることとなった。

1947年インドの独立とともにアッサムのシレット (Sylhet) がパキスタン (Pakistan) に分割されたのである。

1948年，阿片禁止令が施行されたが，これはアッサムの村々に大きな影響を及ぼした。同じくこの年，ガウハティに高等裁判所，ガウハティ大学 (Gauhati University) やそのほかの教育機関が設置された。

1949年10月15日，マニプールの王はシロンに呼ばれ，マニプール王国をインドに編入する合意書に署名させられた。ここにインド独立後も自治を続けていたマニプール王国は消滅したのである。1950年，アッサム地方を大地震が襲い，大被害が発生した。同じくその年の2月26日，インド憲法が発布されて，指定部族制度が施行されることとなったのである。

1956年の春，チベット東北地区でカンパ族の反乱が発生，ダライ・ラマはチベットの独立を宣言した。しかしダライ・ラマはチベットを追われる羽目になり，タワン地区を通ってインドに亡命した。

1960年，ビルマのネ・ウイン首相は中国との間に国境を確定した。この国境策定には，事実上マクマホン・ラインが採用されたのである。

この間に中国とインドの間には国境をめぐって緊張した関係がつづいていたが，中国がインドに対して国境確定のための交渉を呼びかけたのに対して，インドは中国との間にいかなる国境問題も存在していないという態度を取りつづけたのである [マックスウエル　1972: 117–125]。

1962年11月17日，中国軍は国境を越えてインド側に侵攻した。インド軍は総崩れになり，パニック状態のアッサム住民を残して，インド軍隊が敗走したことに対して，アッサム住民の不信感が増大した [Baruah　1985: 652]。しかし4日後の11月21日にいたり，中国側は一方的に停戦を宣言し，軍隊を撤収したのである。このたった5日間の中国のとった軍事行動の意味は，国境問題においてインドのとっている頑な態度に対する懲罰的な行動であったといわれている [マックスウエル　1972: 552–580]。

アッサムの東方地区においては，ナガ，ミゾの民族は，つねに独立を要求してきた。ナガについていえば，彼らはイギリスがインドから撤退するとき，ナガはインドの一部ではなく，イギリスの監督下にあっただけで，インドの独立によって，インドはナガに対する主権を獲得していないと主張した。ナガは文化的にも民族的にも人種的にもインドとは異なり，固有の政治的権利を持つものであると主張した。このような主張のもとに，1947年8月14日ナガ族は N.N.C. (Naga National Council) をつくり，独立を宣言した。

そして，1953年の選挙をボイコットした [Baruah　1985: 649]。1956年ナガ族はナガ連邦政府 (Naga Federal Government N.F.G.) を樹立した。これは中央政府からみれば，ナガの反乱ということになった。中央政府は，この運動を武力で制圧しようとする一方，ナガランドを州に昇格させる懐柔策をとった。

幾多の交渉と衝突の末，1963年にはナガランド (Nagaland) がアッサム州より分割

された。1964年9月6日には，停戦協定が発行した。しかし N.F.G. はその主張を変えておらず，国際司法裁判所への提訴を主張しているが，中央政府はこれは国内問題であるとして，国際司法裁判所への提訴を拒否している [落合　1987: 191]。

1965年3月には，ミゾ族も武装ほう起した。これに対して，ミゾ解放戦線はその本部をビルマ領のジャングルに置き，そこから，ミゾラム州の周辺住民に対して税金を徴集し，それに応じないものを殺害したり，あるいは警察署を襲撃するなどの活動をおこなっているというのが中央政府の見解である [在インド日本国大使館　1982: 37]。

1970年，カーシ・アンド・ジャインティア山地 (Khasi and Jaintia hills) とガロ山地がアッサム州より分離された。

このようにたかまる民族運動に対して，中央政府は1972年には，いままでのアッサム州を分割して民族の自治要求に応じることとし，1月20日にはメガラヤ州を，1月21日にはマニプール州とトリプラ州を設立した。それとともに，北東辺境地方 (North-East Frontier Agency, N.E.F.A.) はアルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) とその呼び名を変え，ミゾラムとともに政府直轄地とした [落合　1987: 192]。

1971年から1972年，バングラデシュ独立戦争が発生した。1972年，アッサムにおける外国人問題をめぐって，全アッサム学生連合 (All Assam Students Union) が結成された [Baruah　1985: 654]。

そして1979年ごろより，再びアッサム州で外国人問題が発生した。それは，非アッサム人とりわけバングラデシュからの難民がアッサム人の経済的な権益を侵害し，アッサム人の政治的，文化的アイデンティティが喪失の危機にさらされるとして，学生や市民が外国人追放を要求し運動を展開したことである。その結果，アッサムからの石油の搬出を阻止するという行動に出たりした [在インド日本国大使館　1982: 36]。

ラジブ・ガンジー首相は，1985年8月15日に，全アッサム学生連合，全アッサム人民闘争会議などのアッサム運動指導者との間に合意を成立させた。その合意において大きな問題点であった外国人の認定は，1966年を基準として，それ以前にアッサムに来た者には市民権を認める。1971年3月24日までにアッサムに来た者は，選挙人名簿から削除するが，10年の後に選挙人名簿に再録する。1971年3月25日以降アッサムに来た者は，アッサムから退去させるとした [落合　1987: 65–66]。

そして1987年2月20日，アルナチャル・プラデシュとミゾラムが，政府直轄地からインド23番目と24番目の州に昇格した [1987年2月21日　朝日新聞]。

1988年12月，インドのラジブ・ガンジー首相は，インド首相としては34年ぶりに中

国を訪問し，国境問題を含めた諸問題を，中国政府と話し合いを行なった。これは，ネール首相が，インドと中国の間に国境問題はないとした態度を大きく変化させたものと受け取られている。そして，インドと中国は，3年間を期限として国境策定の作業にはいることが同意された。

1989年3月，チベットで青年僧侶たちによるチベット独立を求める暴動が発生した。中国政府はチベット自治区全域に対して，戒厳令を出し，チベットへの外国人の立ち入りを禁止した。

（栗田靖之）